



公州観光の穴場ともいえる公山城

朝鮮王朝時代、優雅な両班文化の郷であった忠清道。この地は古くから「清風名月」と称され、体面を重んじ鷹揚なふるまいをよしとする風土がある。折しも今年には忠清道訪問年。ソウルから二時間でアクセス可能だ。自然と百濟の文化が息づく地へ足を伸ばしてみよう。

大田を愛する日本人

「韓国で最も美しい道」に選ばれた順天の仙岩寺の参道を紹介したが（二月号）、そこで韓国・忠清南道の大田に住む日本人、永岡孝子さんに出会った。

永岡さんは一九三三年、京畿道水原生まれ。父は戦前、警察官で、駐在所の所長として、京畿道内を七、八カ所転々とした。植民地時代の日本の警察官といえ、朝鮮総督府末端の権力者として居丈高なイメージがあるが、永岡さんの父親はそうした「悪代官」とは対照的に、地域の朝鮮人の目線に立って文字通り「公僕」として身を粉にして働いた。水の便や道路が悪く、女性が頭に大きな水甕を載せて悪路を往き来せねばな

らないのを見かね、率先して井戸掘りや道路の改修事業を進めた。上から一方的に命令するのではなく、地域社会のために自ら地方の有力者を訪ね歩き、頭を下げて募金活動をしたという。

また現金収入が乏しい農家に野菜の栽培と直売を奨励するなど、住民の生活の改善推進に努めた。地元で賭博グループを一網打尽にしたときも、そのメンバーのうち、だまされて賭博にはまり、牛を取られた人は保釈し、牛も取り戻してやるなど、人情味のある処置をとった。困っている人を放っておけない性格によるものだったそうだ。

朝鮮人の村長ら古老を相手に囲碁をたしなむなど、



済州島

普段から朝鮮人とわけへだてなくつき合った。朝鮮人との間に壁を設けるのが当たり前だった当時においては、異例のことだった。当然、朝鮮語もよくできた。当時、朝鮮語がよくできる日本人は、そのことを悪用する者として朝鮮人からはとくに嫌われることが多かったが、永岡さんの父親は駐在する土地の朝鮮人と肚を割って話し、とても好かれた。

ご自身を通った水原の女学校も、日本人と朝鮮人ができるだけ接触させないようにする当時の日本の政策からすれば、異例の日朝共学だった。同級生同士も仲がよく、ごく最近まで毎年同窓会が開かれていた。

一九四四年に父が急死し、翌年の終戦後、母や姉らとともに日本に引き揚げ、福岡県の京都郡（現・行橋市）に住んだ。その後、看護婦を経て結婚したが、子どもを育て上げ、夫が亡くなると、第二の故郷である韓国での勉学を志し、大田の培材大学に留学、卒業後も大田にマンションを購入しとどまっている。現在でも地域の老人福祉センターに通いながら、韓国語の勉強を続けている。

永岡さんが大田を選んだのは、友人に「暮らしやすいところだ」と勧められたこともあるが、ソウルと比